

CONTENTS

文化人の本音 河合隼雄文化庁長官対談 第55回 ゲスト 三浦朱門 さん ●作家、日本芸術院院長
アマチュアが地域文化を支えているんです4

いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート 55	
鹿児島県歴史資料センター黎明館	22
芸術文化の風 19	
映画(佐伯知紀)	23
著作権Q&A 『著作権なるほど質問箱』から 19	
組織・機関における著作物の利用～図書館～	24
言葉と暮らし 7	
情報産業と辞書研究	25
伝建地区を見守る人々 伝建歳時記 31	
農山村の伝統と取組(群馬県六合村赤岩)	26
くらしが育む文化的景観 7	
園芸をほうふつさせる林業が育む景観(京都市)	28
広げよう「文化力」の輪! 7	
大学、自治体、企業の壁を超えた「学生文化力」	30
風を呼ぼう、わが町に 登録有形文化財建造物との歩み 31	
まちに息づく近代化遺産を生かす 大牟田市の挑戦	31
地域からの「文化力」発信 19	
第21回国民文化祭・やまぐち2006	32
日本の伝統美と技を守る人々 重要無形文化財保持者編 4	
八田清治(芸名富山清鈴)(地唄)	34
国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法 文化財鑑賞の手引き 43	
仏像の眼	35
祭り歳時記 伝承を支える人々 7	
川越氷川祭の山車行事(埼玉県川越市)	36
文化庁の星 4	
ミュージアム支援推進協力官	37
「九州・沖縄から文化力プロジェクト」正式スタート	38
国立劇場開場40周年	39
都道府県立美術館・博物館の 指定管理者制度の導入状況	40
第56回全国民俗芸能大会	41
第53回文化財保護強調週間	41
国立国際美術館 特別展 エッセンシャル・ペインティング	42
東京国立近代美術館 企画展 ジュエリーの今:変貌のオブジェ	42
奈良国立博物館 第58回 正倉院展	43
京都国立博物館 2006年国際シンポジウム 京焼へのまなざし	44
奈良文化財研究所 飛鳥資料館 秋期特別展 飛鳥の金工 海獣葡萄鏡の諸相	44

連載

文化庁ニュース

イベント案内

今月の
表紙

【左上より】文化庁監修『インターネット時代のまんが著作権教室』(財団法人消費者教育支援センター)、パンフレット『学校における教育活動と著作権』、HP「著作権契約書作成支援システム」、HP「著作権なるほど質問箱」

施設紹介
新しい時代に対応した著作権施策の展開

池田朋之・津田大介・橋本太郎・前田哲男・司会 甲野正道・長官官房著作権課

新国立劇場スポットライト45
11月の国立劇場46
芸術文化振興基金ニュース47

題字デザイン 桑山弥三郎

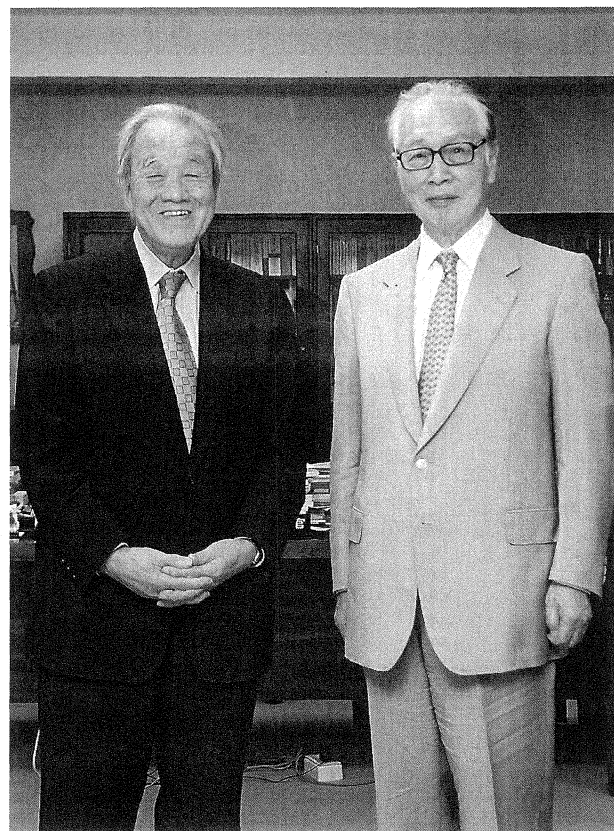
文化庁提言
デジタル化・ネットワーク化時代に対応した著作権制度
寄稿
次世代ネットワーク化社会における情報の流通
座談会
デジタル化・ネットワーク化時代の著作物流通を考える

池田朋之・津田大介・橋本太郎・前田哲男・司会 甲野正道・苗村憲司・甲野正道

21 14 12 10

特集
デジタル化・ネットワーク化時代の
著作物流通を考える

アマチュアが 地域文化を支えているんです



日本まるごと元気文化圏

河合 本日はどうもお忙しいところをありがとうございます。

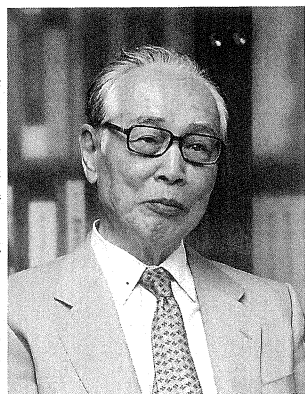
三浦 河合長官にお目にかかったらまず言おうと思ったのは、長官になられたときに、関西の文化復興ということをおっしゃられましたでしょう。あれは、とてもいいことだと思います。日本が一五〇年前に植民地にならなかったというのは、地域文化がしっかりとってたんですね。

河合 そうです。

三浦 そういう意味で、東京一極中心主義というのはよくないんですよ。もちろん地方といえは関西なんですけど、もう一つとしては、明治になってから日本各地というよりも、むしろ敗残の東北各

地から人が集まって、北海道をつくり出すでしょう。北海道にアメリカ的な新しいものをつくっていく。北海道というのは関西と対比して新しい地方文化としておもしろいんじゃないかなと思っただけです。

河合 ほんとね、日本中言いたいで



みうら・しゅもん 大正15年東京生まれ。日本大学芸術学部の教職に就くとともに、第15次「新思潮」に加わり作家活動に入る。中国西域を扱った『冥府山水圖』（筑摩書房、1955）で文壇デビュー。昭和42年『箱庭』（共著『日常と家庭』教文館、1973収載）で新潮文学賞受賞。45年にはローマ教皇庁より聖シルベスト勳章受章。58年『武蔵野インディアン』（河出書房新社、1982）で芸術選奨文部大臣賞受賞。恩賜賞、日本芸術院賞、第14回産経正論大賞など受賞歴多数。平成11年文化功労者選出。昭和60～61年文化庁長官。平成16年より現職。
『若葉学習塾』（新潮社、1981）、『にわか長官の510日』（朝日新聞社、1986）、『結婚なんかおやめなさい』（青春出版社、1980）など著書多数。

す。今、沖縄、九州言うてますがね。今度、先生の助言に従って、北海道を言いますかな。私、おかげであちこち日本中行くんですよ。ほんとに行ったところは、おっしゃったとおりですよ。地域の文化の活力というのは大したものですよ。

三浦 そう思います。そして、めいめいが誇りをもってるんですね。衣食住、生活、つまり文化なんです。ヨーロッパというのはイタリアがあり、フランスがあり、イギリスがあり、ドイツがあり、北欧があり、お互いにキリスト教国として一体感をもちながら、「おれらはあの国とは違う」というふうな……。

河合 それはすごいですから。

三浦 お互いに軽蔑し合っているという言い方は悪いけど、それがヨーロッパの近代化の……。

河合 活力の根本ですね。おっしゃってくださっているとおりですわ。

文化庁長官時代

河合 しかし、先生が文化庁長官になられてから、二〇年たったとは思えません

けど。あのころ、民間人としては二人目でしょう。

三浦 そう思います。ただ、今日出海さんは一人目といいますが、敗戦直後にまだ文化庁がないころの芸術課長をしていらつしやるんです。

河合 そうそう。なられて、いかがでした。

三浦 長官になったのはあさはかだったんですけどね。つまり、結局はうまくいかなかったんですけども。お引き受けした最大の理由は、日本の小説というのは、やはり青年の小説なんです。青年とか、中年の家庭の中での小説なんです。ですから、例えば社会人として、職業人として、長官とか、社長とか、社会の枠組みの中であるポジションをもった人たちの生活、あるいは物の考え方というのは、小説になった場合に一つの新しい未来像が開けるかなと思っただけです。

河合 おもしろいですね、その考えは。

三浦 ただ、それがうまくいかなかったのは、月に二五〇枚ぐらい書いてましたのが、朝九時から夕方まではだめでしょう。

土曜、日曜というのは、長官ご存じのとおり、いろんなセレモニーがあつて、まただめなんです。

河合 そうそう。

三浦 原稿を書いたのは、午前三時か四時に起きまして、八時ごろまでとにかく机に向かつてまして。それで一年半やって、心身ともに疲れ果てましてね(笑)。

河合 それはそうでしょう。そんな創作活動をしながら長官をやるうとされたわけだから。

三浦 河合さんだって、関西にいたときに、辛うじてご自分の世界を確保していらつしやるのかなと思つたんです。

河合 私は今、ほんとの意味の創作活動はしてないです。決心しましてね。そうでないとい、絶対できません。ハア、それは大変やつたでしょう。

三浦 それは大変でした。

河合 しかも、それは新しい世界みたいなもんでしょ。おっしゃつてるとおりで、確かに日本の文学は、家出人の文学といわれるんだけど。

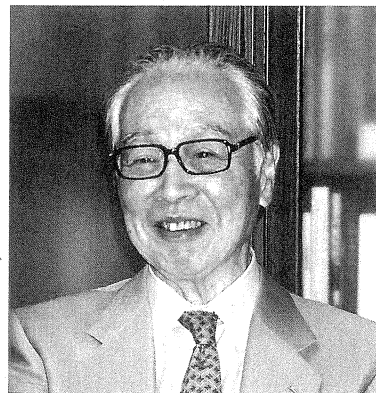
三浦 そうなんです。日本の小説という

た本がありますけれども、その中を見ると、日本の封建時代というのは、唯一文明の進歩と自然保護が両立できたものだということを書いてあるんです。やはり里山というのは、人間が自然を征服するでなく、圧倒されるでもなく、お互いに入り合つて、共存共栄みたいな。それを一部やつておられて、皇太子殿下もそういうところへ行かれて、山の中でどこか一泊されたんじゃないでしょうか。例えば里山などで、その地域の特長性が出てくるといふと思うんです。

河合 みんな、その意識は非常に高いです、今。だから、どこかの県でやるということは、県庁の所在地だけでなく、その県全体に広がって、いろいろなことをやるでしょう。あれはすばらしい。

三浦 国は二億ぐらいですけど、県が十数億出して、波及効果としてその期間に県に落ちる金が、国、地方自治体の予算を含めて三〇〜四〇億にはなるんですね。あと文化団体がそれを機会に、組織化されていったりする。

河合 そう。大きい出し物をやるという



のは大体において、勘当息子の小説なんです。

河合 しかし、今おっしゃつたようなことが、その後だんだん日本の文学でできてきますよ。

三浦 そうですね。ただ、このごろの若い新人というのは、一〇代の感性だけで書いてるところがあつて、ああいう人たちがその感性を失わずに、小説というのは人間のかすみみたいなところをすくつていかなきゃなりませんから、そういうかすを拾うようなところにいけるだろうかなと思つてますけど。



ことはすごいことです。みんなオペラをやつてみたり、ミュージカルをやつたりとか、今まで考えてないことがちゃんとできるんですね、またそれが。

三浦 私はついにできませんでしたが、家で電気を使って音楽をやるとやかしから、近所迷惑になる、出ていけと言われていた彼らがいっきに音量上げてガンガンやれるような場所は、やつぱりつくつてやりたいと思うんですね。

河合 それはこのごろ、自治体がわりとそういうことを考え出していますね。

三浦 そうですね。箱物をいろいろつくつ

河合 それもおもしろい話だな。

国民文化祭

三浦 私のころに国民文化祭というのを始めまして……。

河合 あれはすごいことですね。

三浦 あれはつまり、地方というものと、あるいは芸術といいますと、演奏会をする場所ではなくて、練習する場所をこれからつくつていかなきゃならないなと思つて。

河合 思い切つたことをされましたね。あれはほんとに今生きてますよ。最近も行ってきましてけど。先生は産みの親で、実行委員長をしてくださってますから、よくお行きになりますけど、どうですか、最近のそういうのを見ておられて。

三浦 それぞれの県が特殊性を出そうとしておられるのはいいと思いました。例えば、私、最近でおもしろかったのは、群馬県が里山ということをやっています、里山というのは——最近、『文明崩壊—滅亡と存続の命運を分けるもの』(ジャレド・ダイアモンド著)という有名ななつ

たけど、あまり使われてないから、それならいつそそれを……。

河合 それをどんどん練習に使いなさいとか、また、それこそ金沢じゃないですけど、すごい練習場。あれは大成功しましたね。国でもほんとはそういうものを考えるべきでしょうね。みんな好きにどんどんやれと。あれはおもしろいですね。二四時間好きなようにやらすと、絶対にみんな落書きはしないし、きれいなものだそうですね。

三浦 私のおやじというのは変なおやじでして、「人間好きなことをやつてりゃ間違いない」つて言うんですね。私が歴史の年号なんて丸暗記しようとしてると、「そんなもの覚えたら、試験が終わつて三日たつたら忘れる。かわい女の子の名前を一度聞いたなら、絶対忘れない」。宿題やつてると、「おまえ、妙な趣味があるな」つて言うんです(笑)。そういう親のもとに育ちまして、好きなことをもつてるといふことは強いですね。父の教えの中で残つてるのは、「好きなことをやって、それで飯が食えたらこんないいこと

はない」と。

河合 ほんとにそうです。

三浦 好きなことをやって飯が食えなくても、うまくいかなかったら、あきらめがつくって言うんです。

河合 そうです。それは自分が好きでやっただけです。ところが、もうかろう思うてやっつて、もうからなかったら腹立ちますけどね(笑)。そういう意味では、早くから文筆業に思っただけで、早から、高等学校時代から。

三浦 最近、女房がなんだか知らないけど、泉鏡花を読みたいと言ってます。「泉鏡花全集」というのは、おれが子どものころ、なんかこんな表紙のが出たよ」って言ったたら、孫がパソコンで検索して、手に入れてくれたんです。それを見たら昭和十七年の全集なんです。考えてみると私はそのころ受験勉強してるとき時期なんですよね。

河合 それはそうですわね。

三浦 受験勉強するとき、泉鏡花全集を一所懸命読んでるって、やっぱり好きだったんでしょうね。

河合 ほお、あのころね。今また見直されてますけどね、泉鏡花は。僕も好きなんです。すごいですからね。

アマチュアのがんばり

河合 国民文化祭へ行ったときに思い出したけど、アマチュアでがんばる人が増えましたね。レベルも上がったんじゃないですか。

三浦 そう思います。アマチュアでがんばる人にも、いろんな財団などで表彰したり賞金くれたりしますでしょう。そうすると、今まで姑の手前、肩身の狭い思いしてたのが、堂々と練習に行けるようになりましてとか、そういうことは確かにあると思います。

河合 あるかもしれませんね。

三浦 学校以外の場所で、地域社会の中で伝統の継承が行われる、あるいはブラッシュアップが行われるというのはいいことだと思っています。

河合 各地域へ行つてそういう人たちが話をしても、アマチュアだけど一言言あるとか、ちゃんとやっているとかがあ

ちがいます。そういう人たちがうまく使えたらと思っただけです。

学校へ行きましても、例えば日本の伝統音楽の場合には、わりとうまくいくんです。これとは別なんですけど、私が文化庁にいるころ、歌舞伎関係の人が中学校へ日本舞踊の説明に行つたんです。そのとき扇子で鳥を表現したり、波を表現したり、風を表現したりするんですけど、そのとき子どもたちに、木の床の体育館でしたけど、履物を脱がして正座させて、立ったり座つたりを教えたんです。正座すること、それから立ち方、お辞儀の仕方、それは大事なことで、いいことだなと思つて感心して、私も一緒に正座したり立ったり、お辞儀した記憶があります。ですから、伝統音楽なんかの人たちは、出身小学校、中学校へ行つても、児童・生徒と交流できるようです。

河合 芸術院の方にそういった活動をやっていただくと、ありがたいですね。

私、長官になつてから、やりたいなあと思つて、なかなかできなかったのは、芸術をやつて人と理工系の人をかみ合

すね。あれも感心しますね。日本の国の強いのはそういうところやないかと思つたりします。

三浦 そうです。例えば音楽学部でたくさんあつて、毎年一〇〇〇人単位で卒業生が出るわけです。だけど、その中で音楽家になるのは、ほんと一つまみです。甲子園に出る中で、プロ野球に入るのはほんの一つまみであるのと同じなんです。じゃその人たちは全部だめかというのと、彼らはやつぱり地域文化を支えてるんです。

河合 そう。それはほんとに感じますね。なかなかレベルは高いですよ。

三浦 ちよつとした地方都市のオーケストラの団体なんかは、なかなかいいんです。

河合 いや、ほんと。それは思います。それこそ私は音楽大学を出た女性と一緒に笛吹いてますが、さすがに音大出ですから、一緒にやつても全然違います。そういう人があちこちにいるから、僕らがアンサンブルしたつておもしろいんです。日本中の文化度の高まりがあつて、文化

わして何かやりたかつたんです。なかなかうまくいかなかったんですが、今度ちょっとできそうになつてきてますけども。野依良治先生もそれにはだいぶ関心があるんですよ。

三浦 芸術院の第一部に建築の方がいらつしやるんですね。芸術院の建築家は主にデザインで、学士院のほうは建築の構造とかなんとかなるんですけども。芸術院のデザイナー中心の会員の人たちに、居住空間についての話なんてしてもらえたらおもしろいだろうなと思っんです。

河合 そうですね。芸術院の方が社会貢献したいと考えてくださつてるんだつたら、いろいろ考えられるんじゃないかと思つてるんですけどね。

三浦 予算はそれほどかからないと思っんです。

河合 はい。それと皆さんがやろうと言われる限りは、そんなにたくさんお礼しなくてもやってくださるでしょうから(笑)。

今日はどうもありがとうございました。

(了)

◆特集◆
今、博物館に

何が求められているのか

【有識者提言】
博物館・美術館とは…………… 蓑 豊

【座談会】

国立博物館に期待すること

…………… 郷 通子・野崎 弘・英 正道・

福原義春・吉田 靖

【寄稿】

九州の誇りの博物館…………… 西高辻信良

【施策紹介】

独立行政法人国立博物館の五年間と今後の課題

【事業紹介】

今後の主な展示予定

◆文化庁ニュース◆

私立美術館・歴史博物館をめぐる状況

(公益法人改革)

第五三回日本伝統工芸展

ほか

編集後記

今月号特集「デジタル化・ネットワーク化時代の著作物流通を考える」は、昨今の技術の進展やビジネスモデルの変化等の中で、著作物の流通をいかに捉えるか、また、望ましい著作物流通の在り方とは何か等を、さまざまな視点からご紹介しました。ご多忙中、苗村憲司氏、池田朋之氏、

◆連載◆

【いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート】

福岡県立若狭歴史民俗資料館

【芸術文化の風】

舞踏入門 その2

【著作権Q&A】著作権なるほど質問箱から

組織・機関における著作物の利用 美術館・博物館

【言葉と暮らし】

巨篇の文字

【伝建地区を見守る人々 伝建蔵時記】

漆工町を守る人々(長野県塩尻市)

【くらしが育む文化的景観】

格子状防風林ものがたり

【広げよう「文化力」の輪1】

ただ、タダうれし。関西文化の日!

【風を呼ぼう、わが町に 登録有形文化財建造物との歩み

現役にこだわる 智頭宿の建造物保存とまちづくり

【地域からの「文化力」発信】

第三〇回全国高等学校総合文化祭「京都総文」

【日本の伝統美と技を守る人々】

大場勝雄(芸名大場松魚)・藤 絵

【国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法】

日本刀の姿

【祭り歳時記 伝承を伝える人々】

唐津くんの曳山行事

【文化交流使の活動報告】

本名徹次・指揮者

〈お詫びと訂正〉
本誌平成18年9月号記事中に以下の誤りがございましたので訂正いたします。
●「くらしが育む文化的景観—中世絵図がいざなう農村の原風景」27頁掲載の「重要文化財『陸奥国骨寺絵図』(詳細絵図)」所蔵(調)個人蔵→(正)中京寺大長寿院蔵
●「広げよう『文化力』の輪1—『九州・沖縄から文化力プロジェクト』がいよいよスタート」28頁の表「九州・沖縄文化力推進会議(仮称)の構成」アドバイザーの団体名称(調)九州国立博物館推進財団→(正)九州国立博物館振興財団
読者の皆様、並びに関係各位にはたいへんご迷惑をおかけいたしました。深くお詫び申し上げます。

美術館・博物館チケットプレゼント

今月号の展覧会等のチケットプレゼントは、

A 国立国際美術館
「エッセンシャル・ペインティング」2組(ペア)

B 東京国立近代美術館
「ジュエリーの今：変貌のオブジェ」2組(ペア)

C 奈良国立博物館
「正倉院展」2組(ペア)

です。ご希望の方はアンケートハガキのチケット応募欄に必要事項をご記入のうえ、10月20日(金)までにご投函ください(当日消印有効)。

*チケット発送をもって当選発表にさせていただきます。

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、文化庁月報の感想などを、ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●
<http://www.bunka.go.jp>

文化庁月報 10月号(通巻457)

平成18年10月25日印刷・発行

編集—文化庁

〒100-8959 東京都千代田区丸の内2-5-1

発行—株式会社 ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 編集 03(3571)2126

販売 03(5349)6666

URL: <http://www.gyosei.co.jp>

印刷所—ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円 [本体514円] 送料76円

年間購読料6,480円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

(株)ぎょうせい営業部広告課

電話03(5349)6657(ダイヤルイン)

©2006 Printed in Japan ISSN 0916-9849

本誌は本文に再生紙・大豆油インキを使用しております。